

新刊紹介

文房清玩 第一巻

中田勇次郎著

本書は、宋代に生活した林洪の「山家清事」、陳鵬の「負暄野錄」、趙希鹄の「洞天清祿集」の三篇を翻譯して收めてある。これらはいずれも宋時代に興隆した文房生活に關する隨筆で、筆硯紙墨、法書名畫、はたまた花竹香茶などについての鑑賞法、識別法及びこれら文房に對するさまざまな佳趣をその内容としたものである。この風潮はのちの明清時代へと受けつがれ、それに伴つて各時代に數種の隨筆が存する。譯者は順次それらの翻譯を意企し、總じて「文房清玩」と題して本書をもつて第一巻にあてられた。なお、本紹介が印行されるころ、第二卷明の屠隆の「考槃餘事」が書肆にでるものと思う。

さて、本書は三篇それぞれについての解説とテキストの紹介（ことに洞天清祿集においては多くの紙數を費し、文房清

玩の時代的特質とその變遷ならびにその意義が論述されてある）、それから翻譯及び注釋とからなりたつてゐる。ことに翻譯に際して底本を明示し、他本との校合に留意し、また、注釋については施注する事項の多角的な典故の探索にみられるその視野の廣さなどは、單なる趣味によるものではない譯者の學問的態度が溢れていて好ましい。

かくて、あまりかえりみられない文房生活の事實が、中國文化史上に占める役割を認識し、ひいてはわが國をも含めた東洋文化の源泉を親しく味わうことができる。原文からくる翻譯のむつかしさ、その譯語の選擇、注釋の前後などに多少の難點は感ぜられようが、全體を通してさほど問題ではなく、譯者の流麗な筆致によつて、宋代以後の文學を考える場合にかなりの示唆をはらみ、かつ裨益を受ける點で、とかくみわすがちなこの一面の紹介にまず宋代からはじめられた勞を多とせねばならない。最後に、挿圖にあてられた製墨圖は興味深いものであることを付しておこう。

A5・二玄社・五九〇圓（平野）

魏書釋老志の研究

塚本善隆著

本書の著者、塚本善隆博士はいまさら紹介するまでもなく、わが國における中國佛教史學界の重鎮である。その研究分野は極めて廣く、博士の學問に對する情熱と鋭い洞察力には、いつも敬服するところである。本書は今春京都大學を定年退官するに當つて、出版されたものである。斯學に志してより、魏晉から、唐宋を経て、最近世に至るまで、數々の研究論文を世に問われたが、就中、北魏の佛教史を總合的に解明された「支那佛教史研究—北魏篇—」は實に畫期的な業績であつた。本書はその姉妹篇と稱してよいであらう。内容は次の三篇より成る。

第一、魏書釋老志の研究、解説篇（東方學報京都第三十一號）

第二、譯註魏書釋老志（水野精一・長廣敏雄共著「雲岡」の附録第十六卷・Leon Hurvitz 英譯）

第三、附篇

一、北周の廢佛（東方學報京都第十

六號・第十八號)

二、北周の宗教廢棄政策の崩壊(佛教史學創刊號)

これらは既に公表したものに補正を加えて、一書にしたのであるから研究者には甚だ便利である。

第一篇は「魏書釋老志」の著者魏收(506~572)を通して、彼が生存した北魏、東魏、北齊の佛教を、教義、教團の両面から考察されているのである。そして從來の正史にはみられなかつた「釋老志」が何故に魏書に於て、初めて設けられるに至つたかを明かにされた。

第二篇は北魏の正史「魏書釋老志」の譯註である。釋老志の全文を七十七節に分け、各節ごとにその内容を示す名目を付けられた。それは簡潔にして要を得たものであり、博士の本志に對する造稽の深さを、これによつても充分窺うことができる。その體裁は「本文」・「註」・「譯」・必要に應じて「解説」という順序に配列している。「本文」・「譯文」は百衲本を底本とし、魏書の諸刊本はもろんのこと、更に「廣弘明集」「法苑珠林」その他の諸書に引用、抄出される本志の斷

片までも隈なく涉獵し、校訂している。恐らくこの「本文」は釋老志原型の最も近くまで復元し得たものであり、現在なしうる全ての可能性を盡したもので、「釋老志」の決定版といつても過言ではなからう。曾つて、レオンハヴィッツ氏が博士の勞作を英譯し、海外各國で多大な反響を呼んだのも、これによつて首肯される。「註」は博士の深遠該博なる佛教學、歴史學に對する造稽を物語つて餘りある。

第三附篇一では北周武帝が、儒教主義の立場で、北魏以後隆盛した形式的伽藍佛教の打破にこそ、大乘佛教の眞面目があるとして、廢佛を斷行するに至る經緯を、帝に廢佛を進言した僧侶・衛元嵩・道士・張寶らの動行を中心とし、併せて當時熾烈を極めた佛道二教の確執の有様を興味深く解明されている。北周廢佛の資料としては、唐の護法僧、道宣の「廣弘明集」「集古今佛道論衡」「續高僧傳」などがあり、道宣の記録には僧侶として當然多少の片寄つた修飾があるが、博士は鋭惻、公正な史料吟味をほどこしている。このように、著者が佛教側の史料を

正しく批判、選擇し得たのは、中國一般史に關する理解の深さに據ることは云うまでもない。しかも眞理究明の學問的態度の上に、著者の求道的な風格がにじみでていることは見逃してはならぬことであらう。

附篇二は武帝歿後、澎湃として起り來つた佛教徒の復佛運動に考察を進める。

周武の廢佛が示すように、儒教古典による禮教主義の國家では外來宗教たる佛教は何處に活路を見出すべきかを論究している。博士は—インド的なものの脱皮—即ち『殊に宗教としての佛教は、「今、ここ、私」の問題として求められてくる時、はじめてインドの教學からシナ宗教となつて展開し得る』(516頁)と云われ後の隋唐の佛教はその幾多の動き(天台・華嚴・三階・淨土・禪・諸宗成立)を示したが、その前驅は北周の廢佛を境として始ると論斷するのである。以上本書を紹介したのであるが、この寸評によつて博士の偉大な業績を減ずることをおそるのみである。〔佛教文化研究所出版部、昭和三十六年三月發行、A5版、五四四頁、一五〇〇圓〕(安藤智)